

## ロシアの冷戦史研究に関する予備的考察（1）

駒村 哲 社会科学教育講座

キーワード：冷戦、スターリン、アルヒーフ、イデオロギー、国益

はじめに

いわゆる「冷戦の終結」から 10 年以上経過し、米国や欧州だけでなく、もう一方の主役であったロシア（旧ソ連）においても冷戦の歴史研究が着実に蓄積され、その成果が次々と公表されてきた。

以下本稿で批判的（予備的）に検討するのは、そうしたロシア側の研究成果を総合的かつ詳細に分析したものである<sup>(1)</sup>。

「冷戦」時代—現代史の重要かつ意義ある時代をわがものとするロシア人研究者の活動の最初の 10 年が終わった。歴史家にとっても国全体にとってもこの 10 年は大きな時代にはいる。この活動の中間総括について、その中に見受けられる問題点についてはすでに語ることができ、また「冷戦」の国際研究に対するロシアの学問的貢献を勘案しようと努めることもできる。しかしどのような状況でロシアの学者の活動が行われているか、たとえ簡略でもまず想起させる必要がある。

第 1 に、彼らは重要なソビエトの国家・党文書の閲覧許可を得た。1992-1994 年、ロシア連邦外務省歴史文書局は、1960 年代半ばまでのソビエト対外政策の大量文書の機密扱いを解いた。外務省地域局、大臣及び次官（モロトフ、ヴィシンスキー、マリク、リトヴィノフ、ロゾフスキー、その他）の官房の数万件に及ぶ極秘の公印が取り消された、大使館との往復書簡、会談メモ、分析一覧、その他重要な文書類が研究者に公開された。

また、ソ連共産党中央委員会各部局の文書、総会速記録、書記局と政治局の若干の書類も閲覧できる。「冷戦」史家にとって特に興味深いのは、国際部及び情宣宣伝部の文書、総会での議論、またいわゆる「fond 89」<sup>(2)</sup>である。1990 年代後半には、「イストーチニク」、「ヴェスニク」、「歴史アルヒーフ」、「近現代史」、「祖国史」などの雑誌で入手・公開され始めた他の一連の最重要な史料であり、まず第 1 にロシア連邦大統領アルヒーフから研究者に与えられたものである。それらの雑誌の中にはスターリンの訪問者（リスト）や 1954-1964 年マーリンによって作成された中央委員会幹部会の会議録、その他がある。スターリンのアルヒーフの大半はロシア連邦大統領アルヒーフからロシア国立社会政治史アルヒーフに移され、研究者のアクセス可能になった。

同時に 1993 年からはじまった史料解禁のプロセスと研究者の史料アクセスは難しくなり始めた。ロシア科学アカデミー会員チュバリヤンの言葉によれば、アルヒーフでは「新たな禁止シンドローム」が発生した。外務省及びソ連共産党中央委員会の公開された文書がプレーキをかけられ、多くの文書が様々な口実で再び閲覧できなくなり始めた。10 年が終わろうとする中で非公開のままになっているのは、最重要の情報をもつ「特別ファイル」、それに基づいて行われた国際・国防その他の問題に関するソ連共産党中央委員会政治局及び書記局の決議、中央委員会国際部の史料、1950 年代からソビエト国家指導者および外交官の交渉や会議の多くのメモである。大統領アルヒーフにあるソ連共産党中央政治局及び指導者のアルヒーフへのアクセスもきわめて限られている。1992-1993 年に機密解除さ

れた参謀本部及び軍産複合体の史料へのアクセスも再び禁止された。ところがもちろん軍のアルヒーフ文書がなければ、「冷戦」時代のソ連の軍事戦略や軍事計画立案についていくらかでも正確な理解を得るのは不可能である。KGB（国家保安委員会）のアルヒーフも完全に閉ざされた。結局、機密解除されていないのは、(若干の例外はあるが) 暗号電報すなわちモスクワと外国代表との基本的なコミュニケーション手段である。かくして研究者の掌握しているのは非常に大きいけれども、断片的な基礎史料であり、まだアルヒーフに眠っているものに対しても研究者の状況はよくない。

アルヒーフの問題は「冷戦」にかかわったソビエト側のメモアールの引用により埋め合わせなければならぬ。しかしながらその質と真偽はきわめて様々である。最高指導部のメモアールの中でかなり興味深いのはモロトフとの会話メモ、フルシチョフとミコヤンの詳細な回顧録である。率直さは少ないシェピーロフのメモアールとグロムイコの回顧録は事実上ソビエト対外政策史の政府見解を代弁するものである（それを編集したのは彼である）。政治家や外交官の「実働」部隊の回顧録の中から選ばなければならない本は、トロヤノフスキー、アレクサンドロフ・アゲントフ、ドブリニン、コルニエンコ、ファーリン、クヴィツィンスキー、グリネフスキー、ムサトフ、イスラエリヤン、ブルテンツ、セミリヤグのものである。軍人及び軍・防衛複合体従業員の活動及び見解を反映しているかなり大きなメモアールもある、まず第1に、グリプコフ、アフロメーエフ（コルニエンコとの共著）、デチノフ（サヴェリエフとの共著）、チェルトクの回顧録。最後に、ソビエトの元スパイと KGB 指導者の回顧録である。

「冷戦」問題の研究と公開討議で説得力のある貢献をしたのは、セルゲイ・フルシチョフ、スドプラトフ、グロモフ将軍、リヤホフスキー、その他である。「冷戦」終焉のテーマに関して、ゴルバチョフ周辺から特に積極的な政治ベテランはチェルニャーエフ、シャフナザーロフ、メドヴェージェフ、その他である。ロシアのアーキヴィスト（文書館の専門研究者）のグループ（レベジェフ、ムーリン、クイニン、ピホヤ、プロズメンシコフ、メリチン、その他）は「冷戦」テーマに関するアルヒーフ文書の刊行者であり、最初のコメンテーターである。最後に、歴史家とソビエト原子力プロジェクトのベテランが「冷戦」の最初の10年におけるソ連原子力複合体創設についての著作を公表した。

第2に、もし学問上の孤立克服の必要性和ソビエト時代からの遺産としてもたらされたイデオロギー上の決まり文句や国内検閲を考慮に入れるなら、ロシアの歴史家はきわめて限られた力と手段で「冷戦」の処女地開拓に取りかかったことになる、それも実上ゼロから、あるいはマイナスから。1990年代までソビエトの研究者は基本的に西側研究者の著作を解説したり、もう少しましな場合は西側の史料で西側諸国の政策について書くことができた。そのテーマが思想・プロパガンダの点で教義に屈服した以上、ソビエト政治、政治のメカニズム、ダイナミクス、そして結果の客観的研究は行われなかった。

外務省とソ連共産党中央委員会国際部では国内利用のための「歴史」は存在したが、それらは学問の世界では理解されなかった。

1970年代のデタント期に考えつかれた「冷戦」をテーマとするソ米の歴史家間でのアカデミックな検討プログラムが最初の兆候となったが、1980年代後半にやっと進展がみられた。モスクワ（1986年）と米国オハイオ大学（1988年）での会議で、「冷戦」の時代区分と問題について話し合いが行われた。西側史学史の議論はこのテーマに関するロシア側学者の最初の著作に本質的な影響を及ぼした。こうした会合へのロシア側参加者の多くはモスクワにある世界史研究所からであり、1995年に彼らはこの研究所をもとに「冷戦」研究グループを組織した（チュバリヤン所長、ナリンスキー、エゴロ

フ、フィリトフ、マリコフ、ガイデューク、コロボチュキン、ポズニャコフ)。最近この分野の研究者集団が他の研究者の中心をとらえている。スラブ学研究所（ボルコフ所長、ギビアンスキー、ラトウイシュ、ヴォロキチン、ムラシュコ、ノスコフ）、ロシア史研究所（ブイストロフ、コスティルチェンコ、レリチュク、ネジンスキー、ノヴィク、その他）、極東研究所（レドフスキー、チフヴィンスキーアカデミー会員、その他）、ロシア科学アカデミーサンクトペテルブルク歴史研究所（フルセンコアカデミー会員）、国立モスクワ国際関係大学（トルクノフ学長、ナリンスキー、ペチャトノフ、その他）。

同時にソ連崩壊後、ロシアにおける「冷戦」テーマは新たな問題と課題により後景に押しやられた。今もってどんな研究テーマでも、若い院生、修士論文作成者など主要な予備軍（研究者の卵一著者挿入）はできていない。ロシアの学問の困難な状況、特に人文・社会科学の困難な状況が若い研究者のこの分野への流入を抑えている。

第3に、「冷戦」諸問題に関するロシアの歴史家の活動はこのテーマで広範な国際的協同行動が形成されはじめたときに行われた。米国の「冷戦」史学はロシアの研究に大きな影響を及ぼした（といってもヨーロッパの研究全体にも）。まず第1に、米国外交史に関する米国側の「修正主義」及び「ポスト修正主義」と多数の重要な著作の習得の他に、ロシアの学者は西側のアルヒーフ文書、基本的には米国のそれにきわめてはじめの頃は支えられた。

1990年代に、ロシアの歴史家が米国、西欧・中欧、それに中国、日本、その他の国々の研究者と協力する機会が広がった。この協力は個々及び2国間を基盤に、また国際プロジェクトの範囲内で、まず第1にワシントンのウッドロー・ウィルソン・センターの「冷戦」国際関係史研究プロジェクトやジョージ・ワシントン大学（米国）の国家安全保障に関するアルヒーフ文書で組織された『冷戦』時代の東欧の『ホットスポット』、フェリトリネリ財団（イタリア）などである。ロシアの学者はモスクワ（1993年1月、1998年3月、2002年6月）、エッセンとポツダム（1994年6月）、香港（1996年1月）、ポツダム（1996年11月）、ニュー・ヘブーン（1997年9月）、ワシントン（2000年3月）などで「冷戦」に関する一連の会議の準備と実現に積極的に参加した。

外国の研究者との定期交流はロシアの「冷戦」専門家の国際的視野を急速に広げるのに役立った。それに加えて、史料の自由な流布のおかげで、とりわけアルヒーフのおかげで、研究のための歴史史料ベースの「機動性」拡大を促進した（すなわち学術使用と容易なアクセス）。たとえば1993-2001年にウッドロー・ウィルソン・センターで刊行された『冷戦』国際関係史プロジェクトプレティン、旧ソ連、中国、ポーランド、ハンガリー、旧東独、ルーマニア、ブルガリア、旧チェコスロヴァキア、日本、ヴェトナムのかなりの量のアルヒーフ文書。「プレティン」はロシアの文書刊行を補完する上で重要になった。

第4に、ロシアの「冷戦」史学が開始されたのは、敵のイメージが破壊され、ロシアが西側民主主義世界の一部となって、米国のパートナーとなったように思われ、それでいて大国のままであるとき、昔のイデオロギー規範とソビエト世界観の破綻という状況下であった。時事評論で、広範な社会の中で、とりわけアカデミーのインテリ、歴史分野の素人の中で米国と西欧に対する若干の多幸感、「全人類の価値」の人気の兆候が見られた。同時に昔のイデオロギー上の公理に対してきわめて批判的な態度やソビエト「帝国の」遺産から逃れようとする欲求が形成された。多くの著作で第1位に入ったのは、「冷戦」の発生と継続に対するソビエトリーダー（スターリン、フルシチョフ、ブレジネフ）

の責任と原因についての問題である。特にひときわ目立ちかつ非難されたのはソビエト外交におけるイデオロギー的・メシア的・帝國的動機である。「冷戦」史家はその年の時事評論でよく見られた単純化した解釈に組みしなかった。それにも関わらず、このような社会・政治環境は彼らと彼らが提起する研究課題に影響した。

10年の終わりになってこの環境は目に見えて変化した。西側からの効果的な援助がないときに市場・民主改革の巨大な出費は社会発展の西側モデルの権威を失墜させた。社会・政治意識の最初のプランに入ったのは「ロシアのアイデンティティー」と「国益」の追求であった。後者はますますソ連邦の継承者として、大国としてのロシアの維持と結びついた。西側に対する批判的対応が目立って大きくなり、まず第1に、バルカン、ロシアの「近い隣国」などでの米国と NATO の対外政策に対して。NATO 拡大とコソヴォ戦争は、「冷戦」は終わらずに継続しており、現在すでに民主ロシアに反対していると考えている時事評論家や解説者の間に急に広がった。イデオロギーではなく、地政学上の用語で国際関係について論じることが流行るようになった。ソビエト共産主義のイデオロギーと実践に対する価値・批判的態度が二義的なものに後退した。

おそらくこの10年の世界観的パラダイムに対して、もし第1のものをソビエトの公式イデオロギーと世界観と考え、第2のものを「新思考」と親西欧的ユーフォリアと考えるなら、ロシアで第3の出現について語るができる。ロシアの「冷戦」史学に対する新しい環境の直接の影響に気づくのは簡単であった。例えば、「冷戦」時代のソビエト（特にスターリン）指導部の動機と行動における地政学と「リアリズム」の側面に対する研究者の関心は1990年代前半にはまだ存在した。同時に巧みな批判的「リヴィジニスト」にとって時間は通り過ぎ、「ポストリヴィジニスト」評価の 때가訪れているように思われた。

数年前に行われた西側の「冷戦」史学とロシアの「冷戦」史学の比較分析において、アカデミー会員チュバリヤンはロシア側研究の2つの主な弱点を強調した。第1は、「具体的問題の組立に取り組むロシアの学者は理論的問題の提起を回避し、『冷戦』の原因、性格、本質についての米国、その他の西側諸国で展開された新しい勢力との盛んな議論からまるで孤立しているようだ」。第2は、ロシアの研究テンポが遅れていること、西欧及び米国から「印刷された出版物の特別準備」。

この行を書いているときから状況はよい方へ変わった。ロシアでは10以上の学問的モノグラフが発表され、しっかりしたすばらしい注釈付きの文書集も出た。それらのテーマが含むものはかなり多岐にわたる、すなわちスターリンと「冷戦」、1968年「プラハの春」に対するソビエトの対応、1945-1953年ソビエトの対東欧政策、1940年代のソ独関係、ソ・フィン関係及びソ・ノルウェー関係、「ベリヤ事件」（1953年）に関する史料、「反党グループ」（1957年）、1956年ハンガリー危機におけるソ連の役割、朝鮮戦争でのソ連の政策。手元にはソ米関係及びソ中関係の歴史に関する巻数の多い文書集もある（アカデミー会員のセバスチャノフ、チフヴィンスキー、ミャスニコフ編集）。一言で言えば、ロシアの研究者とアーキヴィストは「冷戦」に関する新しい文書の刊行及び最初の整理で急速に優位性を獲得した。指摘される困難にも関わらず、ロシアの「冷戦」史学は国際的な研究標準レベルに到達した。これについて言われるのは、西側の老練な研究者と対等にロシアの歴史家が国際研究プロジェクトに積極的に参加すること、外国の史学でロシアの研究を引用すること、それからの除外が規準になったことである。

なるほど相変わらず多数の歴史家は経験的研究の枠を越えることは好まない、概念的な問題が提起されても、今もってそれをするのは気が進まず、遠慮がちである。局地的なテーマの範囲を超える、すでに蓄積された新しい史料を総合することは十分だ。部分的にはこれは以下の点で説明できる、最

近まで国際関係の理論と歴史はロシアでは米国ほど激しい議論のある分野ではなかった。米国の国際関係史家がこうした議論から自己の概念的論拠をすでに以前から得ているのに対して、ロシア側はこのような論争に興味を見い出したばかりである。その他ロシアの研究者はすでに言われたように、もしかしたら外国の仲間よりもアクセスできる史料の不足を鋭く実感しているのかもしれない。大統領アルヒーフ文書にふれる一時的なチャンスを得た人のなかには、そのフォンドを体系的に研究せずに、「冷戦」時代のソビエトの動機と決定についてのあらゆるイメージは概略的なものであり、多くの点で思弁的なものであると確信できた。ここから歴史的総合の分野で危険を冒したくないというもっともな願いはさしあたり具体的なものの分析を完全なものにしない。

もちろんそれはロシアの学者が最重要問題について自分のまとまった見解をもっていないということの意味しない、その最重要の問題とは、「冷戦」とソビエト対外政策におけるイデオロギーの役割、「国益」と他のカテゴリー及び別の構造的（個人を越えて広く社会的な）要因との相互関係である。最近それらは「冷戦」の起源においてソビエト外交と米国政策の役割をかなり解釈し直し、ソビエトの内政と外交の相互関係について、軍産複合体と新しい兵器プログラムの役割について、核兵器出現の意味について、より具体的な知識を手に入れた。

ロシアの学者は個人的要因の役割研究（まず第1にスターリンとフルシチョフ）、ソビエトの行動におけるイデオロギーと地政学的志向の研究で重要な貢献を行った、また政策の公式化のプロセスで「インスタンツィヤ」と第二義的な「アクター」との複雑な関係の解明、「冷戦」の転機的及び危機的区分でオールタナティヴと「見逃されたチャンス」の問題検討で重要な貢献を行った。結局彼らは社会の文化的要因、すなわち抑圧専制体制の状況下での歴史的体験、ムード、希望、期待の重要な役割について結論に達した、2極対決にソビエトを動員することの現実的な帰結と限界の検討への道を開いた、西側とソ連で敵のイメージの形成で類似点と相違点について問題提起を可能にした、スターリンからゴルバチョフまでソビエトの指導者とエリートのメンタリティの動きについて問題検討に導いた。

こうした著作の主要な結果は何か？ロシアの歴史家は何で一致し、何をめぐって論争を交わすのか？新しい史料の最初の発掘についてはどこで言うことができるのか、またどんなテーマや時期が把握されずにまだ残っているのか？こうした問いにいくらかでも総花的な答えを出す資格はないので、著者（ズボークとペチャトノフ）は主要なモメントにのみの自分のコメントに限定する。

#### <「冷戦」の起源とはじまり>

この時代とその事件についてはたぶん最も多数の刊行物がある。ロシアの学者が公刊し、注釈をした文書には以下のものがある、戦時中のソ連の政治目的と戦後期のプランを明らかにするもの、米国の核独占がソ連の政策に与えた影響を分析したもの、戦争の最後期に極東に対するスターリンの領土要求に関する新しい文書を研究したもの。提起されたテーマのなかには、1945年末から1946年初めにかけてトルコとイランに対するソビエトの要求、戦時協力から対決へと変わるときのソビエトプロパガンダの再建、チャーチルのフルトン演説に対するスターリンの反応、ソ連・ユーゴスラヴィア関係と1945-46年及びそれ以後の時期の極東におけるソ中関係もある。

ロシアの学者は西側との協力から対決へと変わるときのスターリンの役割に関する国際討論に積極的に参加した。このテーマでは2つのモスクワ会議（1997年10月と1998年4月）と米国のイエール大学（1999年9月）で1回の会議が費やされた。イデオロギー、経済、軍事、その他の方面で米国との対決にソ連を向ける基本的決定を行ったのがスターリンその人であることを疑う人はあまりい

ない。

同時にスターリンに対する研究者の態度ではかなりの違いが見出されうる。ある場合には歴史家はスターリンの個性、対決への彼の傾向と能力の要因を重視する。その考えに従えば、外的な条件、同盟国とライバルの行動、経済的・軍事的・その他の問題はすべて暴君の個性と精神構造を通じて理解される。スターリンの強力な側面にも関わらず、彼の性格の他の特性—すべてのものとすべての人に対する病的な猜疑心、奸計への期待と兵力の権利—「冷戦」に急速に移行する上で主な役割を演じた。「ロージナ」誌上での議論の中で発言したレリチュークの考えでは、スターリンのような人物は西側と協力できない。「冷戦」のイデオロギー上の基盤はスターリンの戦前のプランにすでにおかれていたと彼は考えている。ここには米国の外交史家ギャディスにより最も明瞭に表明された見方が反映している。

他方、暴君は病的であると同時にその内政でも外交でもリアリストであり、完全にプラグマチストの側面ももっているということを考慮に入れる学者もいる。チュバリヤンは、スターリンは「感傷的なことに苦しまず、彼は厳格かつプラグマチックな独裁者だった」と書いている。マリコフの考えでは、「実際物的援助が西側から来ないことをスターリンが確信したとき、彼は国内状況に押しやられて対立へと踏み切った」。「スターリンが共産主義者ではなく、ロシアのツァーリ、本物のツァーリであり、彼の頭の中にはつねに選択肢が若干あったことを認めなければならない」。クドリャシヨフは、1944年10月のスターリンとチャーチルの「パーセント」合意をスターリンが個人的あるいは地政学的利益のためにイデオロギー上の考慮を簡単に無視した証拠とみている。

このテーマでのさらなる議論のかぎは、やっと研究者の自由になりはじめたスターリンのフォンド（ファイル）である。1945-1946年の間、指導者（スターリン—著者挿入）とソビエト同志の往復書簡の早くも最初の分析は以下のことを示している。「冷戦」時のスターリン現象は、暴君・「リアリスト」の結合したものとして最もすばやく理解できるが、こうした個性の評価で2つの側面は対立するものではない。スターリンの頭脳と意志はソビエトの政策形成で巨大かつ決定的な役割を演じた。往復書簡が強調するのは、すでに1945年秋に彼は西側との敵対は避けられないとみなし、戦後の「スパイ」が不可能なことについて側近の同志に急いで警告したというものである。

第2次世界大戦終了後、ソビエトの外交目的がどの程度変化するかを解明するために少なからぬ努力をロシアの研究者は費やした。ロシアの歴史家は多くの外国の歴史家と同様に、ソビエト側の行動におけるイデオロギー一面を研究する際、困難を感じていることは明らかである。たいてい会話は一般的な定義ではじまり、それで終わる。チュバリヤンは、「地政学と社会主義拡大のコースは共同作業で進められ、それは相容れない側面ではない」と書いている。様々な段階で目的として、手段として、それらは「しばしば入れ替わった」。シーモノフはこの時代ソビエトの軍事産業委員会の膨張における主要な動機はソビエト指導部の「大国主義的かつ共産主義的国際主義の野心」であったとみなしている。

新しいやり方で「冷戦」の起源と原因を研究する過程で、「冷戦」を開始した側の責任について問題が提起された。もしソビエト時代に「冷戦」に対する全責任が米国及びその同盟国に負われる一方、1990年代初めに対立する評価が優勢になったなら、今日のロシア史学にとり、もっと客観的な、多様なアプローチがその特徴になっただろう。「冷戦」への移行ははるかにしばしば2つの体制の相互作用の複雑かつ矛盾したプロセスとみなされ、こうした寄与の具体的な相互関係は議論の対象であるけれどもそのプロセスで両者がそれぞれ寄与した。大多数の研究者がこの見方を受け入れないことが目につくが、この見方によればソ連対外政策の拡張は国内要因、ムード、その帝國的・革命的イデ

オロギーの「コード」である。とりわけレーニンとスターリンからゴルバチョフまでのソビエト対外政策の特徴としての「革命的・帝國的パラダイム」に関するズボークとプレシャコフの概念は「あれこれの時代に支配的なパラダイムの成分にしたがい、その時代のソビエト政策史の人工的分割」に対するあまりに抽象的かつ指導的なものとして世の非難を招いた。マリコフとペチャトノフはイデオロギー上の考慮と膨張に対する独裁の要求が「冷戦」の原因分析で主要な役割を演じなければならないというパイプスの見解に反対した。これらの学者とナリンスキー、フィリトフもまた第2次大戦から「冷戦」への移行の際、ソ連の地政学上の利害の連続性とその制約を切り離れた。マイルスキー（賠償）、リトヴィノフ（講和条約）、ヴォロシーロフ（休戦条件）の各政府委員会の文書に基づいて、戦後秩序に関するソビエトの理解は西側大国との勢力圏の「友好的」分割の可能性を認めるものであると彼らは結論した。欧州安全保障に対するソビエトのアプローチの動きを分析して、類似の結論へと至ったのはエゴロフである。

すべての歴史家が一致する点は、戦後期のしっかりした「ゲームプラン」がクレムリンには存在しなかったということである。チュバリヤンが考えるのは、戦争終結でソ連では目的の明確さに代わって「有名な曖昧さ」が到来したこと、スターリンが明確な長期的政策コンセプトを明らかにもっていなかったことである。こうした「曖昧さ」の主な原因は米国の政策にあった、すなわち米国は世界を勢力圏に分割することを認めようとせず、自国の戦後プランの主要な脅威をソ連に見出し、ソ連をそれが占めている地位から追い出す路線をとったことにあるという意見にロシアの歴史家はますます傾いた。「冷戦」のはざままで基本的な地政学上の契機であったのは、米国の巨大なパワーであるというリーフラーの結論を学者たちは認めている。ペチャトノフの考えでは、米国によって「冷戦」の場が決められ、米国にはグローバルな行動の機会と意図があった—「ソ連に対して西側が行うことにスターリンを依存させる計画」。ある人（レリチューク）は以上のことから「米国が最強の国であり、新しい世界戦争は必要ない」と結論した。しかし他の人は米国人が自国の力の優越を意識したことの現れ、その容赦しない反ソビエト主義、スターリン指導部をすみに追いつめたことを強調する。ペチャトノフが総括して言うには、「ソ連は降伏するにはあまりに強く、勝利するにはあまりに弱かった。スターリンにとり、『冷戦』の悪循環はこれで閉じた」。同時に米国側はソビエト膨張の限界を「認める」のを諦めた。反対に彼らはモスクワとの直接対決は不可避であるとの結論に至った。クドリャシヨフが指摘するのは、「必要な流れとして米国人の気分がスターリンのソ連ほど悪くないように形成された」。ソ連が「勝者として、また単純に大国として地政学上の危険となったとき、世論は急速に反ソビエトに『変わった』」。

現在、ソ連と西側との対決の起源と原因に努力している学者は新しい研究と発見の入り口に立っている（とりわけ、スターリン、モロトフ、ミコヤン、その他の国家指導者の個人ファイルからの文書習得を考慮して）。ソビエトの経済・貿易政策、特にブレトンウッズ交渉から「マーシャルプラン」までの最も重要な時期はまだ完全には研究されていない。東欧だけでなく、西欧に対するソビエトの政策をよりよく理解しなければならない。ソビエトの対独政策の総合的研究も必要である。「トルコ」危機や「イラン」危機、とりわけその軍事的・政治的側面の研究でもまだ多くのことがなされなければならない。最近の著作に若干見受けられる緊急の課題になっているのは、ソ連の内政と外交の相互関係の総合的な研究である。結局、地域研究にとり、広い場が開かれている—この点で最も興味深いのは、ザカフカス、バルト海沿岸と極東であり、「冷戦」という状況下戦略上最前線の境界となったところである。

## 注

- (1) В.М.Зубок,В.О.Печатнов. “Отечественная историография  
《холодной войны》:некоторые итоги десятилетия”  
//Отечественная история.2003.№4.стр.143-150.
- (2) このフォンドは 1992 年ロシア連邦憲法裁判所で審理された「ソ連共産党事件」に対して特別の手続きで機密解除され  
た文書史料からなるものである。

## 参考文献

- 1 Чубарьян А.О. Новая история 《холодной войны》  
//Новая и новейшая история.1997,№6.
- 2 Чуев Ф. Сто сорок бесед с Молотовым. Из дневника  
Чуева. М.,1991.
- 3 Хрущев Н.С. Воспоминания: время, люди, власть. В 4 т. М.,1999.
- 4 Микоян А.И. Так было: размышления о минувшем. М.,1999.
- 5 Шепилов Д.Т. Воспоминания//Вопросы истории.1998.№3-12.
- 6 Громыко А.А. Памятное. Кн.1-2. М.,1988.
- 7 Трояновский О.А. Через годы и расстояния, М.,1997.
- 8 Александров-Агентов А.М. От Коллонтай до  
Горбачев а. М.,1994.
- 9 Добрынин А.Ф. Сугубо доверительно: посол в Вашинг  
тоне при шести президентах США (1962-1986 гг.). М.,1997.
- 10 Корниенко Г.М. «Холодная война»: свидетельство  
ее участника. М.,1994.
- 11 Фалин В.М. Без скидок на обстоятельства:  
политические воспоминания. М.,1999.
- 12 Квицинский Ю.А. Время и случай: заметки  
профессионала. М.,1999.
- 13 Гриневский О.А. Тысяча один день Никиты  
Сергеевича. М.,1998.
- 14 Мусатов В.Л. Предвестники бури: политические  
кризисы в Восточной Европе.1956-1981. М.,1996.
- 15 Брутенц К.Н. Тридцать лет на Старой площади. М.,1998.
- 16 Грибков В.И. Карибский кризис  
//Военно-исторический журнал.1993.№1.
- 17 Ахромеев С.Ф., Корниенко Г.М. Глазами маршала и  
дипломата: критический взгляд на внешнюю  
политику СССР до и после 1985 года. М.,1992.
- 18 Черток Б.Е. Ракеты и люди: горячие дни холодной



- войны. М., 1999.
- 19 Крючков В. А. Личное дело. М., 1996.
  - 20 Судоплатов П. Разведка и Кремль: записки нежелательного свидетеля. М., 1996.
  - 21 Кеворков В. Тайный канал. М., 1997.
  - 22 Леонов Н. С. Лихолетье. М., 1995.
  - 23 Кирпиченко В. Разведка: лица и личности. М., 1998.
  - 24 Павлов В. Операция «Снег»: полвека во внешней разведке КГБ. М., 1996.
  - 25 Шебаршин Л. В. Из жизни начальника разведки. М., 1994.
  - 26 его же. Рука Москвы: записки начальника советской разведки. М., 1992.
  - 27 Феклисов А. С. За океаном и на острове: Записки разведчика. М., 1994.
  - 28 Хрущев С. Н. Никита Хрущев: кризисы и ракеты. Т. 1-2. М., 1994.
  - 29 Судоплатов А. П. Тайная жизнь генерала Судоплатова: правда и вымыслы о моем отце. М., 1998.
  - 30 Ляховский А. А. Трагедия и доблесть Афгана. М., 1995.
  - 31 Громов Б. В. Ограниченный контингент. М., 1994.
  - 32 Чубарьян А. О. Происхождение «холодной войны» в историографии Востока и Запада // Новая и новейшая история. 1991, No. 3.
  - 33 Плешаков К. В. Истоки «холодной войны»: размышления участника советско-американской конференции. // США: экономика, политика, идеология. 1991, No. 4.
  - 34 Зубок В. М. Никто не хотел воевать: еще раз об истоках «холодной войны» // США: экономика, политика, идеология. 1991, No. 4.
  - 35 Гайдуки И. В., Коробочкин М. Л., Наринский М. М. (ред.). «холодной войны»: новые подходы, новые документы. М., 1995.
  - 36 Нежинский Л. Н. (ред.). Советская внешняя политика в годы «холодной войны» (1945-1985). Новое прочтение. М., 1995.
  - 37 Кортунов С. В. «холодной войны»: парадоксы одной стратегии // Международная жизнь. 1998, No. 8.
  - 38 Голик Ю. В., Карасев В. И. Почему даже «демократическая» Россия не устраивает

- 《свободный》 Запад?//Полис.1999.№3.
- 39 Гайдук И.В.,Егорова Н.И.,Чубарьян А.О.(ред.). Сталин и «холодная война». М.,1998.
- 40 Латыш М.В. «Пражская весна» 1968 г. и реакция Кремля. М.,1998.
- 41 Волокитина Т.В.,Исламов Т.М.,Мурашко Г.П.,Носкова А.Ф.,Роговая Л.А.(ред.). Восточная Европа в документах российских архивов.1944-1953. Т.1-2.М.;Новосибирск,1997-1998.
- 42 Волокитина Т.В.,Мурашко Г.П.,Носкова А.Ф.,Покивайлова Т.А. Москва и Восточная Европа. Становление политических режимов советского типа (1949-1953): очерки истории.М.,2000.
- 43 Волокитина Т.В.,Мурашко Г.П.,Наумов О.В.,Носкова А.Ф.,Царевская Т.В.,Советский фактор в Восточной Европе.1944-1953. Документы. Т.1-2.М.,1999-2001.
- 44 Чубарьян А.О.,Коробочкин М.Л.,Ристе У.,Хольцмарк С.и др. Советско-норвежские отношения,1917-1955.М.,1997.
- 45 Орехова Е.Д.,Середа В.Т.,Стыкалин А.С.и др. Советский Союз и венгерский кризис 1956 года.Документы. М.,1998.
- 46 Кынин Г.П.,Лауфер Й.. СССР и Германский вопрос,1941-49: Документы из Архива внешней политики Российской Федерации. Т.1-2.М.,1996,2000.
- 47 Наумов В.П.,Сигачев Ю.(ред.).Лаврентий Берия.1953: Стенограмма июльского пленума ЦК КПСС и другие документы.М.,1999.
- 48 Торкунов А.В., Загадочная война: корейский конфликт 1950-1953 годов.М.,2000.
- 49 Ржешевский О.А., Война и дипломатия: документы, комментарии,1941-1942.М.,1997.
- 50 Филитов А.М. В комиссиях Наркоминдела—Вторая мировая война. Актуальные проблемы.М.,1995.
- 51 Мальков В.Л. «Манхэттенский проект»: разведка и дипломатия. М., 1995.
- 52 Смирнов Ю.Н. п еСталин и атомная бомба //Вопросы истории естествознания и техники.1994. No. 2.
- 53 Батюк В.,Евстафьев Д. Первые заморозки: Советско-американские отношения в1945-1950гг. М., 1995.
- 54 Славинский Б.Н. Ялтинская конференция и проблема

- 《северных территорий》: современное документальное переосмысление. М., 1996.
- 55 его же. Советская оккупация Курильских островов и планы захвата северной части Хоккайдо // Знакомьтесь—Япония. 1993. No. 1.
- 56 Егорова Н. И. «Иранский кризис» 1945–1946 гг. на основе рассекреченных архивных документов // Новая и новейшая история. 1994, No. 3.
- 57 Чубарьян А. О. (ред.). Сталинское десятилетие «холодной войны»: факты и гипотезы. М., 1999.
- 58 Печатнов В. О. Фултонская речь Черчилля // Источник. 1998. No. 1.
- 59 Волков В. К. Узловые проблемы новейшей истории Центральной и Юго—Восточной Европы. М., 2000.
- 60 Ледовский А. М. СССР и Сталин в судьбах Китая. Документы и свидетельства участника событий 1937–1953. М., 1999.
- 61 Лельчук В. С., Сагателян Г. Ш., Советское общество будни «холодной войны» М., 2000.
- 62 Симонов Н. С. Военно—промышленный комплекс СССР в 1930–1950-е годы: темпы экономического роста, структура, организация производства и управление. М., 1996.
- 63 Наринский М. М. Европа: проблемы границ и сфер влияния (1939–1947) // Свободная мысль. 1998. No. 3.
- 64 Афанасьев Ю., Лельчук В. (ред.). Советское общество: возникновение, развитие, исторический финал. Т. 1. М., 1997.
- 65 Данилова А. А., Пыжиков А. В., Рождение сверхдержавы: СССР в первые послевоенные годы. М., 2001.

(2005年9月22日 受理)